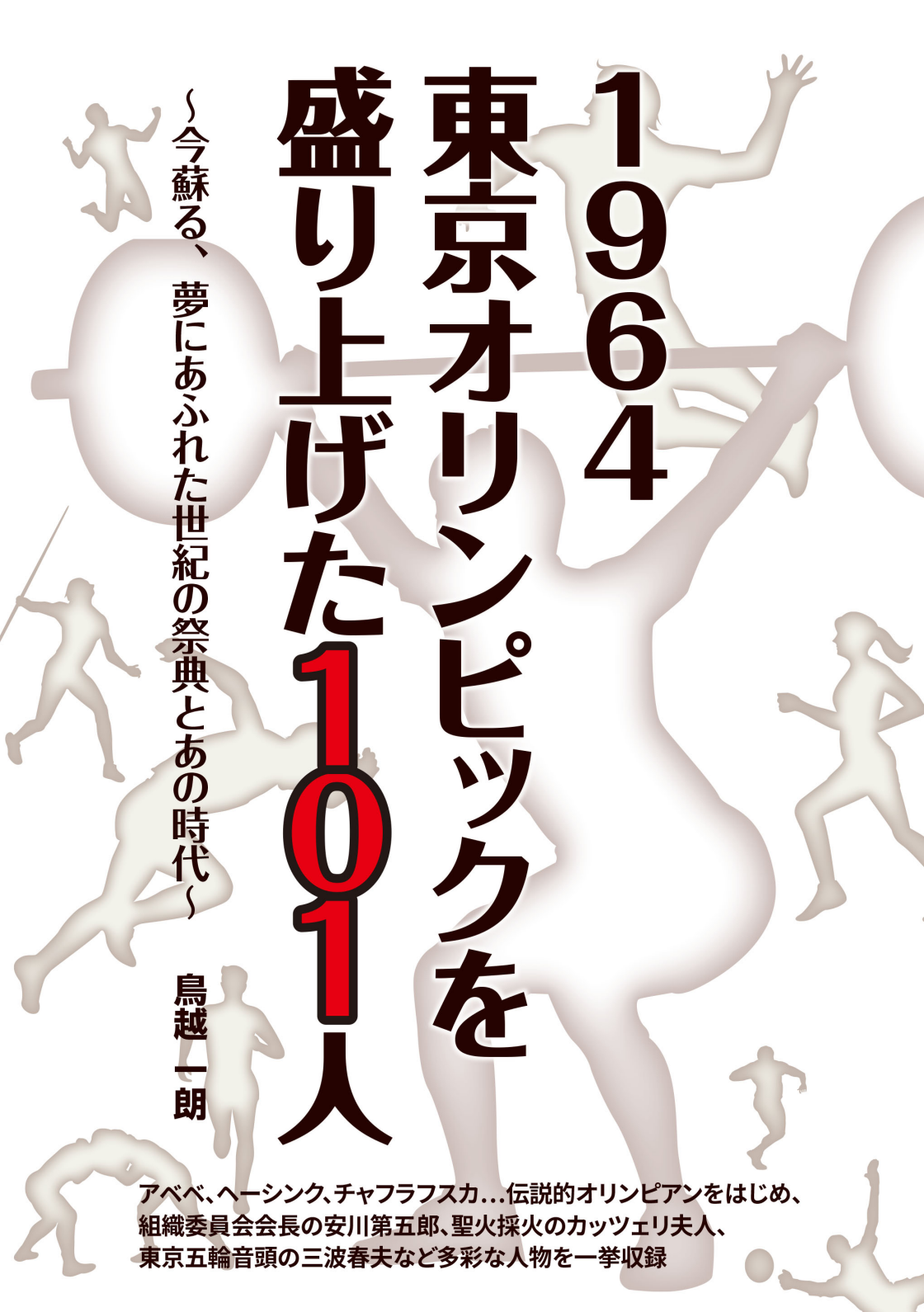




1964 東京オリンピックを 盛り上げた 101人

（今蘇る、夢にあふれた世紀の祭典とあの時代）

鳥越一朗

アベベ、ヘーシンク、チャフラフスカ...伝説的オリンピックをはじめ、
組織委員会会長の安川第五郎、聖火採火のカッツェリ夫人、
東京五輪音頭の三波春夫など多彩な人物を一挙収録

開会式

①	岡伊玖磨「オリンピック序曲」の作曲者でエッセイスト	14
②	古関裕而「入場行進曲「オリンピック・マーチ」」の作曲者	16
③	北出清五郎「開会式の実況アナウンサー」	19
④	安川第五郎「大会運営の最高責任者」	21
⑤	アベリー・ブランドージ「不屈のIOC会長」	24
⑥	今井光也「ファンファーレの作曲者」	26
⑦	東龍太郎「ホスト役を務めた東京都知事」	28
⑧	鼓隊員「沈着冷静な小学生たち」	30
⑨	坂井義則「聖火リレーの最終走者」	33
⑩	小野喬「選手宣誓を行った日本選手団主将」	36
⑪	ブルーインパルス「空に五輪を描いたパイロットたち」	38
ヘコラム①	仏映画『シエルブルーの雨傘』の上映始まる	41

陸上

⑫	ボブ・ヘイズ「人類初の9秒台を逃した男」	43
---	----------------------	----

⑬	飯島秀雄「30年ぶりに現れた日本の名スプリンター」	47
⑭	佐々木吉蔵「号砲を極めた名スターター」	49
⑮	ヘンリー・カー「『世界一速い車』と謳われた短距離走者」	52
⑯	森本葵「日本記録を30年近く保持した中距離ランナー」	54
⑰	ビリー・ミルズ「インディアンを引く長距離ランナー」	56
⑱	ラナトゥンゲ・ガルナナンダ「栄光のラストランナー」	59
⑲	ナフタリ・テム「贈り物に癒されたケニアのランナー」	60
⑳	ガストン・ローランツ「大酒のみのイケメンランナー」	63
㉑	ケネズ・マシューズ「ゴールして夫人と抱き合った英国紳士」	65
㉒	ワレリー・ブルメル「芸術的「ベリーロール」で優勝」	67
㉓	山田宏臣「日本初の8メートルジャンパー」	69
㉔	岡崎高之「お家芸と呼ばれた三段跳びの後継者」	73
㉕	フレッド・ハンセン「アメリカの伝統を守った歯科大生」	76
㉖	アル・オーター「円盤投げで三連覇、メキシコでも勝ち四連覇」	78
㉗	菅原武男「4回転投法の先駆者」	80
㉘	楊伝広「敗れたアジアの鉄人」	83

ヘコラム②	プロ野球日本シリーズで南海が阪神を破って日本一に	85
29	ワイオミア・タイアス〜女豹のごとく、しなやかに疾走〜	87
30	ベティ・カスバート〜種目を変え、8年ぶりに金メダルを獲得〜	89
31	アン・パッカー〜四百の無念を八百で晴らす〜	91
32	依田郁子〜独特の精神集中法で入賞を果たしたハードラー〜	94
33	ヨランダ・バラシュ〜「またぎ跳び」で堂々の二連覇〜	97
34	マリー・ランド〜世界記録で優勝を決めた英国ジャンパー〜	99
35	タマラ・プレス〜投擲2種目を制覇したソ連女子のエース〜	102
36	エルビラ・オゾリナ〜敗れて丸坊主になった前回優勝者〜	104
37	辛金丹〜直前に帰国した、悲運の世界記録保持者〜	106
ヘコラム③	ソ連が3人乗り宇宙船、ウオスホート1号を打ち上げ	109

マラソン

38	アベベ・ビギラ〜「裸足の王様」から「走る哲学者」へ〜	112
	(アベベこぼれ話)	
	○レースひと月前に盲腸炎の手術	117

	○アベベは最後尾で競技場を後にしたか	118
	○ヘーシンクと談笑	118
	○はだしの謎	119
	○朝鮮戦争に参加	120
	○5位になったアベベ	120
	○優勝翌日に自転車レースを応援	121
	○失くした指輪	122
39	バイジル・ヒートリー〜見事だった「後半の追い上げ」〜	123
40	円谷幸吉〜国立競技場に唯一人日の丸を上げた男〜	126
41	君原健二〜東京は8位も、メキシコで銀、ミュンヘンで5位〜	130
42	寺沢徹〜15位に終わるも、その直後に日本記録を樹立〜	132
43	ジム・ホーガン〜30キロまでアベベを追った男〜	134
	ヘコラム④ キング牧師のノーベル平和賞受賞決定	137

水泳

44	ドン・ショランダ〜「怪童」と呼ばれた名スイマー〜	139
45	山中毅〜3大会にわたって日本を沸かせた男〜	142

46	福島滋雄〜写真判定で銅メダル逃す〜	144
47	佐々木末昭〜世界記録保持者ロイ・サーリを破る〜	146
48	福井誠〜「男前」の日本選手団旗手〜	150
49	鶴峯治〜20歳から水泳を始めた遅咲きの花〜	152
50	門永吉典〜若さで6位入賞をつかみ取った高校生〜	155
51	ドン・フレーザー〜オリンピック水泳史上初の三連覇を達成〜	157
52	クリスチヌ・キャロン〜敗れたパリジエンヌ〜	160
53	田中聡子〜敬服に値するベテランの粘り〜	163
54	木原美知子〜選手からタレントに転身〜	165
55	ガリナ・プロズメンシコワ〜ソ連に水泳で初の金メダルをもたらす〜	167
56	イングリット・エンゲル・クレーマー〜統一ドイツの旗手に選ばれた飛込み選手〜	169
へコラム⑤〜ソ連のフルシチョフ首相が突如辞任〜		172

重量挙げ・体操

57	一ノ関史郎〜最初に日の丸を上げた日本選手〜	174
58	三宅義信〜日本に最初のコメダルをもたらした「小さな巨人」〜	176

59	レオニード・ジャボチンスキー〜ソ連が生んだ世界一の力持ち〜	178
60	遠藤幸雄〜日本待望の体操男子個人総合優勝者〜	180
61	山下治広〜「ヤマシタ跳び」の創案者〜	183
62	早田卓次〜種目別つり輪を制した期待の新人〜	185
63	ベラ・チャフラスカ〜女子個人総合優勝の「体操の花」〜	187
64	ラリサ・ラチニナ〜女子体操界のレジェンド〜	190
65	池田敬子〜「ローマの恋人」と呼ばれた日本の女子体操選手〜	192
へコラム⑥〜中国、初めての核実験を実施〜		194

格闘技

66	中谷雄英〜日本柔道に最初のコメダルをもたらす〜	197
67	岡野功〜中量級を制した「昭和の三四郎」〜	199
68	猪熊功〜「神猪時代」の一翼を担った重量級勝者〜	200
69	神永昭夫〜日本の悲願を一身に背負ってヘーシンクに挑む〜	202
70	ヘーシンク〜柔道を世界に広めた功労者〜	205
71	吉田義勝〜レスリング・フリー・フライ級優勝〜	208

72	上武洋次郎くレスリング・フリー・バンタム級優勝く	210
73	渡辺長武くレスリング・フリー・フェザー級優勝く	211
74	花原勉くレスリング・グレコローマン・フライ級優勝く	213
75	市口政光くレスリング・グレコローマン・バンタム級優勝く	215
76	杉山恒治く東京大会後、プロレスに転向して成功く	216
77	八田一朗く「八田イズム」で恐れられたカリスマ指導者く	218
78	桜井孝雄く日本初のボクシング金メダリストく	221
79	ジョー・フレイジャーくアリの好敵手となるボクシングヘビー級優勝者く	223
80	大川平八郎くフルーレ団体4位入賞の立役者く	225
ヘコラム⑦	ウィルソン英新首相とビートルズ	229

球技・その他

81	デットマール・クラマーく「日本サッカーの父」と呼ばれたドイツ人く	231
82	松平康隆く「魔女」を乗り越えた男く	234
83	大松博文く「魔女」を率いた「日本の父」く	237
84	河西昌枝く身だしなみに気を使った「魔女」のキャプテンく	239

85	ヤン・クルミンく身長218センチのバスケットボーラーく	244
86	ラルル・モヒンダルく因縁の対決に決着を付けたシューターく	247
87	吉川貴久くフリーピストルで2大会連続の銅メダルく	250
88	ハロルド皇太子くヨット種目に出場したノルウェーの王族く	252
89	井上喜久子く馬術に出場した日本の紅一点く	255
90	フィレンツェ・テレクく近代五種個人で優勝の裁判所判事く	259
ヘコラム⑧	「愛と死を見つめて」が大ヒット	262

開会式まで

91	平沢和重くIOC委員を動かした名スピーチく	264
92	田畑政治くオリンピックを東京に引き寄せたロビイストく	266
93	大島鎌吉く金メダル数を予言した日本選手団長く	268
94	亀倉雄策くシンボルマークとポスターの制作者く	271
95	丹下健三く世界を驚かせた奇抜な建築デザインく	273
96	鈴木萬之助く聖火台をつくった名鑄物師く	276
97	渥美清く紅白歌合戦に登場した聖火ランナーく	277

98	三波春夫く東京五輪音頭を大ヒットさせた歌手く	279
99	アレッカ・カツエリく招待された聖火採火のギリシャ人巫女く	281
100	池田隼人くオリンピックととも去った首相く	284
101	市川崑く「記録か、芸術か」で物議を醸した映画監督く	286
ヘコラム9	テレビ人形劇「ひょっこりひょうたん島」が子供たちの人気に	290

番外・忘れられない「いだてん」たす

【番外1】	ピーター・スネルく中距離2種目を制したマツチヨマンく	292
【番外2】	モハメド・ガムディーく3大会でメダルに輝いた「チュニアの星」く	295
【番外3】	ロン・クラークくラストに弱かった世界記録保持者く	298
【番外4】	マモ・ウォルディくアベベの影に隠れた実力者く	300
【番外5】	アブドン・パミッチく雨の中、テープを引きちぎってゴールく	302
【番外6】	イレナ・キルシエンシュタインく くアメリカを撃破したポーランドのリレーメンバーく	304
【番外7】	イリナ・プレスく姉譲りのパワーで五種競技に優勝く	306

ヘコラム10	グアム島へ旧日本兵の搜索隊派遣	308
--------	-----------------	-----

はじめに	2
「1964東京オリンピックを盛り上げた101人」関連年表	312
主な参考文献	314
あとがきに代えて	316
著者プロフィール	317
奥付	317

開会式

Ⅰ 団伊玖磨「オリンピック序曲」の作曲者でエッセイスト

第18回オリンピック東京大会の開会式は、1964（昭和39）年10月10日、新宿区霞ヶ丘町の国立競技場で行われた。午後1時45分に天皇皇后両陛下が同競技場に到着、この会場内には荘重な「オリンピック序曲」が流れ、電光掲示板の上の3本のポールには、中央にオリンピックの旗、左に日章旗、右に東京都旗が掲揚され、スタンドの上にはずらりと並んだポールには、参加94カ国の国旗がへんぽんとひるがえった。

さて、式典の冒頭を飾ったオリンピック序曲の作曲者は、団伊玖磨である。名前から想像できるように彼は高貴の生まれ。父は男爵の団伊能、祖父は32（昭和7）年の血盟団事件で暗殺された、三井財閥の総帥、団琢磨である。小学校時代からピアノを習い、東京音楽学校（現・東京芸術大学）作曲部に進学、戦時中は陸軍戸山学校音楽隊にも所属し、卒業後はクラシック音楽の作曲家として活動した（もともと「ぞうさん」などの童謡も手掛けているが）。

東京オリンピック時は40歳で、作曲家として正に脂の乗り切った時期であった。この5年前には、

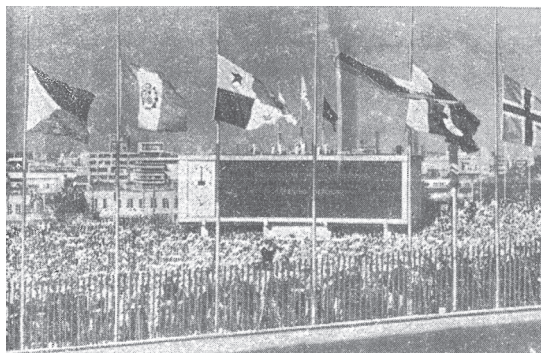
皇太子（明仁親王）美智子妃御成婚を祝して「祝典行進曲」の作曲もしている。東京オリンピックの翌年、歌手・俳優として人気沸騰する加山雄三が、自らの作曲家ネームを団伊玖磨と山田耕作から採って、「弾耕作」としたのは有名な話だ。

ところで、団は名エッセイストでもあった。天は二物を与えたのである。アサヒグラフにオリンピック開催の64年から連載したコラム『パイプのけむり』は、軽妙洒脱の文章が大いに人気を呼んで、36年も続くロングランとなった。その後単行本化され、全27巻に及んだが、それぞれのタイトルが洒落ていた。

2巻以降、「パイプのけむり」というタイトルの前に、続、続々、又、又々、まだ、まだまだ、も一つ、なお、なおなお、重ねて、重ね重ね、なおかつ、またして、さて、さてさて、ひねもす、よもすがら、明けても、暮れても、晴れても、降っても、さわやか、じわじわ、どっこい、しっとり、さよなら、が付けられていったのである。

このエッセイ集の中に「聖火」という一文があって、

「大体、聖火などと言うが、何の聖なのかさっぱり判らない。火種は、太陽から凹面鏡を利用して採るのだそうだが、それならなおさらのこと何でわざわざアテナイなどという片田舎から大騒ぎをして持って来るのか、馬鹿馬鹿しいことである。（中略）その上、その火種を持った若い人が、煙を出



国立競技場にひるがえる各国旗（「日本経済新聞」1964年10月10日夕刊）

しながら日本中を走り回り、それには七千三百本のトーチが用意されたというのだから、一体全体、いつの間に日本は拝火教の国になったのかと、神がかりの嫌いな僕は情けなくなってしまう」と、聖火リレーをこき下ろしているところが面白い。

拝火教（ゾロアスター教）は、3世紀頃栄えたササン朝ペルシャの国教だったと、高校の世界史で習った覚えがあるが、40（昭和15）年の東京オリンピック開催が決まった時（後年、戦争のため返上された）には、神国らしく国内の神社で聖火を採火すべきだという意見があったらしい。2001（平成13）年5月17日、77歳で死去。

2 古関裕而の入場行進曲「オリンピック・マーチ」の作曲者

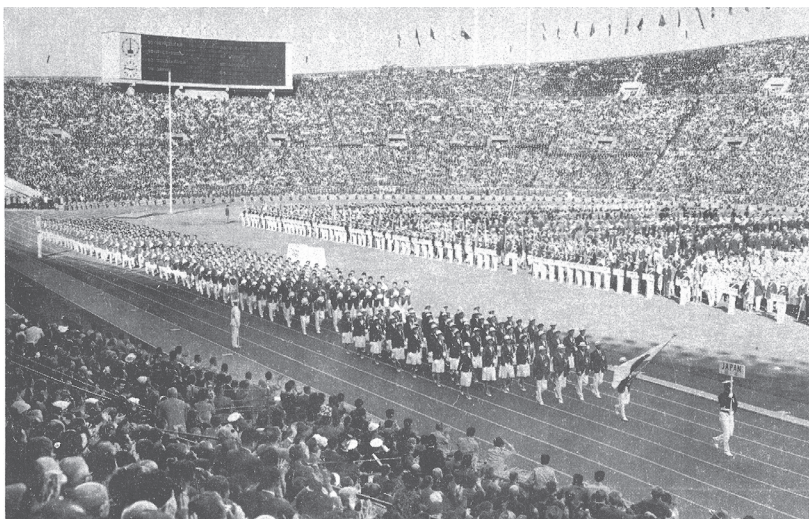
天皇がロイヤルボックスに臨席する際、場内には「君が代」が流れ、その演奏が終わった午後2時、第1回大会の開催国ギリシャを先頭に、各国選手団の入場行進が始まった。会場はもとより、テレビの置かれた全国の茶の間も、一挙に大きな興奮に包まれた（に違いない）。

参加国それぞれの个性的なユニフォームやパフォーマンス——それらを一段と引き立てたのが、陸上自衛隊音楽隊が奏でる、心の浮き立つような明るく軽快な行進曲だった。私は今でもこの曲を聴くと、条件反射的に鳥肌が立つ。

行進曲の名は「オリンピック・マーチ」。作曲したの

は古関裕而である。古関と言え、1952（昭和27）年に始まったラジオドラマ『君の名は』の主題歌の作曲者として有名だ。他にも、へ勝つて来るぞと勇ましくのフレーズで知られる「露営の歌」や、「六甲おろし」と「んがり帽子」「モスラの歌」「高原列車は行く」「イヨマンテの夜」など、軍歌から童謡まで幅広いジャンルの作曲を手掛けている。しかし、戦前にはクラシックの作曲家としても注目を集めていたことは、余り知られていない事実かもしれない。正に昭和の天才音楽家なのだ。

古関は、本名を古關勇治といい、09（明治42）年に福島県福島市の呉服店を営む家に生まれた。父親が音楽好きで、当時珍しかった蓄音機が家にあり、いつも音楽が流れる環境の中で幼少期を送った。家業を継ぐため、地元の商業学校に進み、音楽には独学で取り組むようになる。著名な作曲家・山田耕作に傾倒し、山田の著作『作曲法』などを熟読した。



日本選手団の入場行進（「日本経済新聞」1964年10月10日夕刊）

ラストシーンは、互いに子持ちの既婚者となった二人が偶然出会い、少し話をして気持ちを吹っ切るようにして別れるのだが、大ヒットした哀愁溢れる主題曲に浸りながら、鑑賞した日本の多くのカップルは、平和憲法のありがたみを改めて噛みしめたかもしれない。

戦争絡みと言えば、第2次世界大戦終戦前後のイタリアを舞台にしたイタリア映画『ブーベの恋人』もこの年の9月に公開されている。クラウディア・カルディナーレとジョージ・チャキリスの共演で、主題曲（日本ではいしだあゆみとザ・ピーナッツがカバーした）とともにこれも大ヒット。カルディナーレはC・Cの愛称で親しまれた。

当時、セクシー女優に対してこういう呼び名が流行り、ちなみにB・Bはブリジッド・バルドー、M・Mは、もちろんマリリン・モンロー（62年死去）である。

『シェルブルールの雨傘』は若者を中心に人気を博したが、同様の形式のミュージカル映画はその後広まらなかったようだ。オリンピックの翌年、子供から大人までが楽しめるミュージカル映画が日本にやってくる。65（昭和40）年6月に『サウンド・オブ・ミュージック』が、同年12月に『メリー・ポピンズ』が日本で公開されたのだ。いずれもジュリー・アンドリュース主演のアメリカ映画だった。

小学5年生だった私は、この二つの映画にすっかりのめり込んで、周囲の大人たちに頼み込んで（泣き落として）何度も映画館へ見に連れて行ってもらったものである。もちろん、レンタル・ビデオなどという便利なものの無い時代だった。

陸上

12 ボブ・ヘイズ／人類初の9秒台を逃した男

オリンピックのメイン種目、陸上競技は、大会5日目の10月14日から始まった。陸上競技の中でも、一番華やかなのが、世界一速い人間を決める男子百メートルである。しかも東京大会では、人類が初めて10秒の壁を破るかどうか注目を集めていた。その一番手として、大会前から名前が上がっていたのが、アメリカの21歳の黒人選手、ボブ・ヘイズであった。

男子百メートルは第1回アテネ大会（1896年）から行われ、その時優勝したアメリカのトーマス・バークの記録は12秒0。前回1960年のローマ大会の優勝者、ドイツのアルミン・ハリーの記録は10秒2であったが、彼はそのふた月前に10秒0の世界記録を樹立していた（ちなみに、ハリーはドイツの週刊誌「クイック」の専門解説員として、東京大会に顔を見せている）。

その後、カナダのジェローム・キューバのエステベスも10秒0を記録したものの、10秒の壁は厳然と人類の前に立ちはだかったままだった。ヘイズは42年、フロリダ州ジャクソンビルの生まれで、フロリダA&M大学に進学し、東京大会の前年に百ヤード（91・44メートル）走で9秒1の世界新記録

を出し、一躍東京大会の優勝候補となった（当時、欧米ではヤード単位のレースがまだ盛んに行われていた。77年、国際陸連はヤード制を廃止）。

ヘイズは第1次予選10秒4、第2次予選10秒3と軽く流していたが、準決勝で実力を露わにした。トップでゴールした時、時計は9秒9を示し、ついに、と思わせたが、追い風5メートルのため参考記録にとどまった（追い風2メートル未満なら公認）。

公認の9秒台が期待された決勝では、ライバルのジェロームやキューバのフィゲロラを問題とせず圧勝したものの、残念ながらタイムは10秒0の世界タイ記録に終わった。

183センチ、86キロのがっしりした体。フォームは、やや内股で上半身を大きく前後にうねらせる独特のもので、お世辞にもスマートとは言えなかったが、その後しばらく、上半身をうねらせて走る黒人の短距離選手をよく見るようになった。おそらくは、ヘイズの影響だろう。

彼がその力をいかんなく発揮したのは、むしろ四百メートルリレー決勝であった。アンカーのヘイズにバトンが渡った時、アメリカチームは7番目と大きく遅れていた。ヘイズはバトンを受け取るや猛ダッシュして、あっという間に前を行く6選手をごぼう抜きし、トップでゴールしたのだ。39秒0



400mリレーでバトンを受け取ったヘイズ（下左）
（「'64東京オリンピック」1964年）

の世界新記録。瞬間、持っていたバトンを空高く放り投げ、それがカッコよくて、体育の時間に先生の目を盗んでよく真似をしたものである。

東京大会後、ヘイズは9秒台に固執することなく、あっさりと陸上競技に別れを告げ、プロフットボールの世界に飛び込んだ。貧しい工員の家で育ち、子供の頃から貧乏に耐えてきた彼は、大の母親思いだった。酒、タバコはやらず、飲むのはミルクだけ、と冗談を言った（当時の日本の小学生たちは、給食に出る脱脂粉乳に苦しめられていたが）。

東京大会にも母親を同行させ、レース後のインタビューで「金メダルはママにプレゼントする」と答えている。プロに移ったのも、しっかり稼いでママを喜ばせたかったのかもしれない。

俊足を買われて陸上競技からプロフットボールへ転向する選手は少なくなかったが、成功例はそれほど多くなかったようだ。ヘイズは例外的に活躍し、ダグラス・カウボーイズのワイドレシーバーとしてスーパーボウルに二度出場し、優勝も経験している。オリンピックの金メダルとスーパーボウルの優勝を両方手にしたのは、ヘイズが初めてだった。

さて、人類が10秒の壁を破るのには意外と時間がかかった。68年6月20日、全米選手権準決勝で、ジム・ハインズ、チャールズ・グリーン、ロイ・レイ・スミスという3人の黒人選手が、9秒9を記録する。「9秒台突入」のニュースは世界を駆け巡ったが、この記録は手動計時によるものだった。

注意すべきは、東京大会の決勝でヘイズが出した10秒0は電動計時であるということだ。東京大会では国際陸連の認可を得て、オリンピックでは初めて電動計時を公式記録としたのであるが、スター

トとゴールにタイマーが機械的に連動する電動計時は、ストップウォッチを人間の手で押す手動計時に比べて、ふつう0秒1から0秒2遅くなるといわれていた。

実際、10月13日の毎日新聞では、「手より遅くなる電子時計」という見出しで、東京大会では短距離種目での世界記録は全く望めない、と解説している。手動計時との差を補正するため、スタートの号砲から0秒05遅れて時計が作動するように設定されていた（この補正は70年まで実施された）が、やはり手動計時よりは遅くなるだろう、というのが大方の見方だった。

小川勝著『10秒の壁……「人類最速」をめぐる百年の物語』によると、実は東京大会では電動計時の補助として、計測員3人が手動計時を行っていて、ヘイズの決勝タイムは、9秒9、9秒9、9秒8だったという。もし、東京大会が手動計時を採用すると決めていれば、史上初の9秒台の栄誉は、ヘイズの頭上に輝いていたことになるのだ。

東京大会以降、オリンピックでは電動計時が採用されるようになるが、一般の競技会では手動計時でも公認記録とされたため、電動計時のみを公認とすることが決定する76年までは両者が混在していたことになる。その間は両者の整合性を図るため、100分の1秒まで計測可能な電動計時も、手動計時と同様10分の1秒単位で発表された。

さて、ヘイズは、手動による9秒9を出した3カ月後の10月14日、メキシコオリンピックでも9秒9で優勝し、この時の補正無しの電動計時9秒95が、電動での最初の9秒台ということになった（76年時点で遡^{さかのぼ}って公認された。この時、なぜか東京大会の記録までは遡^{さかのぼ}らなかったようだ）。

もともと、競技場のあるメキシコシティーは、標高2200メートルの高地で空気抵抗が小さく、トラックもオリンピックとしては初めての全天候舗装（タータン）であった。全盛期のヘイズを同じ条件で走らせてみたかったと思うのは私だけだろうか。

プロフットボールを引退してから、ヘイズの生活は乱れたようだ。ミルクしか飲まなかったはずが、アル中で数回入院し、コカイン、睡眠薬の密売に絡んで逮捕、収監もされている。俊足を生かして二つのスポーツに活躍したヘイズだが、死に急ぐのもまた早かった。2002年9月18日、59歳の若さで世を去ったのだ。腎不全だったといわれる。もし、彼のママがまだ存命だったとしたら、さぞ悲しんだことだろう。

13 飯島秀雄く30年ぶりに現れた日本の名スプリンター

男子百メートルに出場した飯島秀雄^{いいじまひでお}（早稲田大学）は、この種目で日本人初のメダル獲得が期待されていた。東京大会開催の3カ月前（6月26日）に、西ドイツで10秒1の日本記録を樹立していたからだ（当時の世界記録は10秒0）。それまでの日本記録10秒3は、「^{あかつき}暁の超特急」と呼ばれ、1932（昭和7）年ロサンゼルス大会で6位に入賞した吉岡隆徳^{たかよし}が持っていた（吉岡の日本記録は、当初は世界タイ記録でもあった）。



たようで、45年後の2009年、オーストラリアの彼女の自宅に強盗が入った時、71歳のフレーザーは臆することなく、強盗の股間を蹴り上げて見事撃退したという。

52

クリスチヌ・キャロンが敗れたパリジェンヌ

フランスの16歳の水泳選手、キャロンが来日すると、日本のマスコミは彼女を追い掛け回した。それは、彼女が女子百メートル背泳の優勝候補であり、前年のプレオリンピックにも出場して（二百メートル背泳で田中聡子に次いで2位だった）日本ではお馴染みだったことであろうが、第一の要因は彼女のルックスがキュートだったからに相違ない。本国では「キキ」という愛称で週刊誌のカバーガールにもなるぐらいだった。性格もお茶目で、愛嬌を振りまき、選手村の交流施設、インターナショナル・クラブではすぐに一番人気となった。

連日のように彼女の写真が新聞紙上に取り上げられたが、折しも、東京大会開幕の直前にカトリヌ・ドヌーヴ主演のフランス映画『シエルブルーの雨傘』が公開されており、また、シルヴィ・ヴァルタン主演の『アイドルを探せ』も大ヒットしていたから、フランス女性に対する関心の高まり（特に世のお父さんたちの）もあったのだろう。

キャロンは、パリの街から少し南に離れたモンルージョのマンションで、両親と姉2人、弟3人の

7人で暮らし。パリ郊外のラ・フォンテーヌの中学に通い、有名なブローニュの森にあるプールで練習するという、日本人にとっては憧れの環境に身を置いていた。「パリジェンヌ」という言葉を、私はキャロンの記事を通じて、初めて知ったように思う。

13日に行われた女子百メートル予選で4組に登場したキャロンは、1〜3組でそれぞれトップだったアメリカの3選手の記録を上回る1分8秒5のオリンピック新記録で決勝に進んだ。マスコミは彼女の優勝を信じてますます過熱し、そうなれば彼女は間違いなく東京大会のヒロインの一人になっていたであろう。

さて、翌14日の決勝。50メートルのターンは、世界記録保持者のデュンケル（アメリカ）、キャロン、ファーガソン、田中聡子などがほぼ同時であった。そこから、ファーガソンが早いピッチでわずかに抜け出す。それをキャロンは懸命に追ったが、ついに届かなかった。ファーガソン1分7秒7、キャロン1分7秒9。ともに世界新記録で、3位のデュンケルも1分8秒0で泳ぎ、自己の持つ1分8秒3の世界記録を更新した。

優勝したファーガソンはキャロンと同じ



練習を終え明るさを振りまくキャロン
（「毎日新聞」1964年9月29日）

16歳。そばかすのある、あどけなさの残る風貌が、いかにもアメリカ少女風で印象に残った。白人は色素の関係でそばかすができやすく、女性の場合はそれがかえって魅力となって、「そばかす美人」という言葉は日本でもよく耳にした。

私などは、そばかす美人と聞けば、ジョアンナ・シムカス、マドレーヌ・ジョベールといった映画女優の名がすぐ頭に浮かぶが、近年、そばかすは「しみ、そばかす」とひとからげにして、忌み嫌われる存在のようだ。「そばかす美人世代」としては、はなはだ残念というほかはない。

（顔中そばかすだらけの少年・アルファルファが活躍するアメリカのテレビドラマ『ちびっこギャング』が始まったのは1961（昭和36）年のことである）

さて、敗れたキャロンは、表彰式の際、涙にくれるファーガソンの腕をそっと支える姿が話題になったものの、現金なもので、その後マスコミが彼女を取上げるとは余りなくなった。

百メートル自由形に出場したスウェーデンのハクベリ（やはり16歳だった）も「水の妖精」と称されるほどの美少女で、前年のプレオリンピックで優勝した時には、「彼女の住所を教えてください」という問い合わせが新聞社に殺到するほどだったが、東京大会では7位に終わったため、ほとんど話題にならなかったようだ。

引退後のキャロンは、その美貌と愛嬌のある性格を生かして女優の道に進み、アラン・ドロン主演で日本でも公開されたフランス・イタリア合作映画『太陽が知っている』（69年）のほか、何本かの映画に出演したという。

53

田中聡子く敬服に値するベテランの粘りく

田中聡子^{さとし}は、東京大会の水泳競技で一番期待された日本の女性選手であつたろう。大会前から「サトコ」というカタカナで彼女の名が新聞の見出しにたびたび載った。長崎県佐世保市出身。筑紫女学園高等学校2年生の時、二百メートル背泳ぎで世界新記録を打ち立て、一躍注目を浴びた。1960年、18歳で迎えたローマオリンピックでは、百メートル背泳ぎに出場し、見事銅メダルを獲得した。記録は1分11秒4で、3位から5位まで同タイムという接戦を制してのメダルだった。

高校卒業後、八幡製鉄（現・新日鉄住金）に入社。東京オリンピックを目指すことになるが、今度には金メダルをとるという声が当然のように高まった。それに応えようと、彼女は会社の屋外プールで、連日勤務した後に猛練習を繰り返した。しかし、世界は長足の進歩を遂げていた。

東京大会の前年に行われたプレオリンピックで、田中は強敵キャロン（フランス）を下して優勝したが、種目は得意とする二百メートル背泳ぎだった。オリンピックでは女子背泳ぎは、まだ百メートルしか行われていなかった。同種目では1分9秒台の田



決勝レースを終え引き上げる田中（「日本経済新聞」1964年10月13日夕刊）

中に対して、キャロンをはじめ外国勢は、1分8秒台を連発していた。

だから東京大会で、22歳の田中は、期待されながらも苦戦が予想されていたのだ。ライバルたちはいずれも15、6歳、体も158センチの田中に比べると大柄で、若さと体力があった。予選1組に登場した田中は、アメリカのハーマーに0秒2差の1分10秒0で2位に入った。予選は通過したものの、2組〜4組は、デュンケル（アメリカ）、ファーガソン（アメリカ）、キャロンが、それぞれ1分8秒9、8秒8、8秒5のオリンピック新記録でトップを取り、田中の記録は全体の6番目、このままではメダルはおろか入賞すら危ぶまれた。

田中はレースの終わったプールに戻り、かなりハードなトレーニングを行ったという。そして迎えた翌14日の決勝。50メートルまでは8人がほとんど横一線。75メートルで、ファーガソン、キャロン、デュンケルの3人が飛び出す、田中も必死に食らいつく。

着順は1位ファーガソン1分7秒7、2位キャロン1分7秒9、3位デュンケル1分8秒0で3人とも世界新記録、田中は惜しくも4位となったが、自らの記録を0秒8も短縮する1分8秒6の日本新記録だった。メダルこそ逸したが、予選から1日で態勢を立て直し、アメリカの一角を崩した力泳ぶりは、正に称賛に値するものであった。

ロープ越しに健闘をたたえ合う上位3人に対し、田中はコース半分ぐらいをゆつくりと泳いだあと、プールサイドに上がり白いガウンを纏（まと）って引き上げた。その姿にスタンドから惜しめない拍手が送られたのだった（会場のはずれでは、決勝に残れなかった妹分の木原美知子が、そっと涙を拭っていた

という）。

田中は東京大会のあと引退して結婚、子育てをしながら、ぜんそく児のための水泳教室を開くなど、水泳の普及に努め、また自らもマスターズ大会で泳ぎ続けた。

54

木原美知子〜選手からタレントに「転身」

東京オリンピックで木原美知子（みちこ）は日本の女子選手として、数少ないアイドル的存在だった。16歳という若さと、167センチ59キロのすらりとした体、そして可愛らしいルックスで「ミミ」という愛称とともに人気を博した。フランスのキャロンが「キキ」と呼ばれていたから、彼女に対比されるような存在だったのだろう。

自由形、バタフライ、背泳ぎ、個人メドレーと何でもこなしたが、東京大会では、個人種目としては百メートル背泳ぎに絞って出場した。予選は、デュンケル（アメリカ）と同じ1組となり、彼女に次いで2着になったが、記録は1分11秒1で決勝には残れなかった。

しかし、16日に行われた女子四百メートルメドレーリレー予選の1組に、日本チームの最終泳者（自由形）として出場し、日本はアメリカに次いで2着、4分40秒6の日本新記録を出した。翌日の決勝ではメダルこそ逃したものの、アメリカ、オランダ、ソ連に次ぐ4位となり、見事入賞を果たしたの

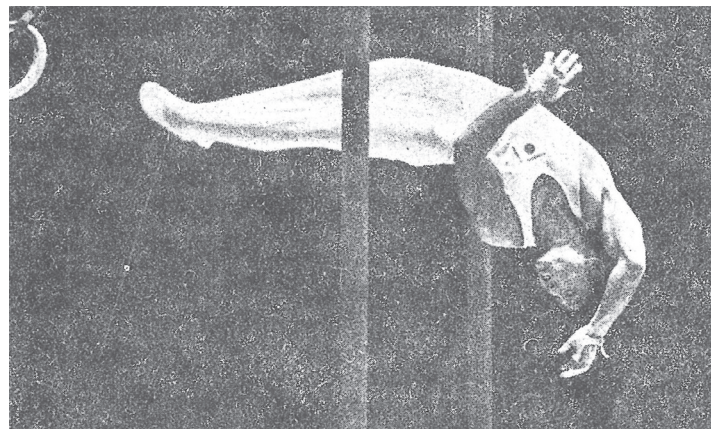


3人の日本選手のうち3番目に登場。演技に入ると、十字懸垂、下水平などの技を堅実に決め、着地にも成功して9・750を出し、合計19・475で金メダルを獲得した。試合終了後のインタビュで、早田は、

「まだ、優勝の実感がわいてこない。（種目別は）つり輪だけなので、6種目分の力を全部出し切るつもりでやった。遠藤先生の着地ミスがあつて、ここで金メダルを逃しては、と猛烈にファイトがわき、これが優勝に結びついたと思う。自分としては、練習、試合を通じて最高の出来だった」と語った。

早田は1940（昭和15）年、和歌山県田辺市生まれで、当時23歳。日本大学を卒業して同大学の助手をしていた。「力、技の流れともに非常に優れ、安定した演技といい、落ちついた態度といい、新人とは思えない」と当時の新聞は早田を評している。オリンピックの代表決定戦では、遠藤に次いで2位だったが、本番で見事、ベテランを凌いだのだった。

早田はその後も競技を続け、76年モントリオール大会では、体操日本代表のチームリーダーを務めた。日大では文理学部教授まで上り、2018（平成30）年現在、元五輪選手によるスポーツ教室な



早田のつり輪の演技（「朝日新聞」1964年10月23日）

どを行う日本オリンピック協会の理事長を務める。

63

ベラ・チャフラスカ〈女子個人総合優勝の「体操の花」〉

「東京大会の花」といえば、まずチャフラスカ（チェコスロバキア）を思い浮かべる人は多いだろう。22歳の彼女は、159センチ、57キロと日本人と変わらない体格。生来の美貌（ブルネットの髪、大きなブルーの瞳、真珠のように白い肌、神秘的な笑顔）に加え、しなやかな技で、体操女子個人総合と種目別の跳馬、平均台で優勝し、団体総合でも銀メダルを取って、一躍人気者になった。

ソ連のライバル、ラチニナ、アスタホワとの戦いは、正に「美の競演」の名に値し、彼女のことを「東京の恋人」と称賛する声もあった。唯一、種目別の段違い平行棒で、上のバーから下のバーに移る際に誤って転落し、5位に終わったが、失敗すればしたで、世間はそこからも彼女の人間的な魅力を感じ取るといった有様であった。

チャフラスカは、前回のローマ大会にも出場し、団体で銀メダルを獲得、個人総合では8位だった。63年の東京国際スポーツ大会（プレオリンピック）では、ソ連勢に敗れ、「審判の点の付け方がソ連に甘い」と不満を漏らし、悔し涙を流した。「次は絶対に勝つ」の言葉どおり、東京大会でようやく大輪の花を咲かせたのだった。



チャフラスカの平均台演技（「毎日新聞」1964年10月16日）

東京大会後もチャフラスカは競技を続けたが、68年メキシコ大会直前の8月21日、母国チエコスロバキアに大事件が起こった。当時、同国内は民主化の動きが進み、政府は「人間の顔をした社会主義」を目指す「二千語宣言」を公表し、チャフラスカもそれに署名していた。そうした「プラハの春」と呼ばれる事態に危機感を抱いたソ連が、ワルシャワ条約機構軍を編成して、チエコの首都プラハ

に侵攻したのである。

この事件を日本の新聞は一面トップで大きく取り上げ、当時中学2年だった私は、今にも日本が戦争に巻き込まれるような危機感を覚えたものである。この時、合宿中だったチャフラスカは、山小屋に身を隠しながら、トレーニングを続けたといわれる。そして迎えたメキシコ大会。彼女は、個人総合と種目別の跳馬、段違い平行棒、ゆかで優勝、団体総合、平均台でも2位に入り、何と女子種目のすべてでメダルを獲得した。世界は彼女に感嘆の拍手を送ったのだった。

メキシコ大会の開会中に、チャフラスカは東京大会の陸上千五百メートルの銀メダリストで、同じ国のヨゼフ・オドロジルと結婚式を挙げた。大会後、彼女は競技を引退、一女一男に恵まれた。し

かし、10年後、夫婦の関係は破綻し、離婚に至る。

89年、東欧の民主化はチエコにも及び、共産党政権が崩壊する「ビロード革命」が起こった。かつての「国民のヒロイン」チャフラスカは、民主化の象徴として担ぎ出され、大統領補佐官やチエコオリンピック委員会の会長といった要職が用意された。しかし、不幸が再び彼女を襲う。

93年8月、別荘地のディスコに行った彼女の息子が、たまたまそこで酒に酔ったかつての父親、オドロジルと出会う。口論の末もみ合いとなり、息子の手がオドロジルに当たった。オドロジルは救急車で病院に運ばれ、二度の手術が行われたが、約1カ月後に息を引き取った。

この事件以降、チャフラスカは体調を崩し、精神も病んで、一時自宅に籠りきりになったという。2011年3月11日、東日本大震災のニュースが世界中に伝わった。その翌日、日本チエコ友好協会会長あてに長文の激励メッセージが届く。差出人はチャフラスカだった。愛する日本の惨状を、彼女は看過することができなかったのだ。

その年の5月、東京で行われる世界体操選手権に彼女を呼ぼうという声上がり、すぐにそれは実現の運びとなった。再び東京を訪れたチャフラスカは、選手権の観戦以外にも、歓迎会、後援会、テレビ・ラジオへの出演など引っぱりだこで、充実した7日間を送ったという。

16年8月30日、「東京大会の花」は散った。74年の生涯だった。そのひと月前、彼女はプラハで朝日新聞のインタビューに応じている。既にがんで余命宣告を受けていて、「2020年は、雲の上から大好きな日本に向かって手を振りますね」と恬淡と語った。

チャフラスカは東京、メキシコの両オリンピックで、合わせて7個の金メダルを取ったが、女子体操でそれを超える9個の金メダルを獲得した選手がいる。ソ連のラリサ・ラチニナである。金メダル9個は、パーヴォ・ヌルミ（フィンランド・陸上）、マークスピッツ（アメリカ・水泳）、カール・ルイス（アメリカ・陸上）と共に歴代2位タイの記録。ちなみに、歴代1位はマイケル・フェルプス（アメリカ・水泳）で、2004年アテネ大会から16年リオデジャネイロ大会までの間に23個の金メダルを獲得している。

ラチニナはウクライナの出身。バレエから体操に転向し、1954年の世界選手権でデビュー、オリンピックは56年のメルボルン大会が初出場だった。いきなり個人総合で優勝し、種目別の徒手（ゆか）、跳馬、団体でも金メダルを取って、一躍大会のヒロインとなった。続く60年ローマ大会でも、個人総合と徒手で二連覇、団体でも金メダルを取った。

ムチのようなしなやかな体から流れる美の表現は、「女子体操の見本」とされ、特にモダンバレエの要素を取り入れた徒手は絶品で、ポリシヨイバレエ団から誘いがあったほどだったという。

私生活では、結婚、出産、育児を経験し、いわゆる「ママさん選手」の草分け的存在だった。58年、モスクワで開催された世界選手権の女子個人総合で優勝したが、のちに、

「金メダルは娘のターニャと二人で取った。娘はおなかの中にいたのです」と語り、妊娠しながら

出場したことを明かしている。

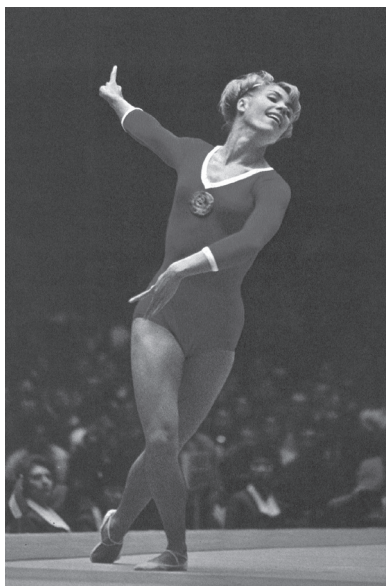
こんな彼女だから、30歳で迎えた東京大会では正にレジェンドだった。しかし、個人総合の三連覇を目指す彼女の前に立ちはだかったのが、チャフラスカだった。彼女は前年の東京国際スポーツ大会（プレオリンピック）では、ラチニナに敗れているが、その差はわずか0・782点。ラチニナの老獪さか、チャフラスカの若さか、世界はその「華麗な対決」に注目した（チャフラスカを薔薇とするなら、ラチニナは山百合と例えられた）。

そして本番、規定問題の初めこそラチニナがリードしていたが、自由問題でのチャフラスカの奔放な演技が彼女を上回り、金メダルは合計点数77・564を出したチャフラスカの手に渡った。ラチニナは76・996で2位だった（3位は同じソ連のポリーナ・アスタホワ）。

試合後、ラチニナはスポーツマンらしく、「強く、勇気のある立派な選手だ」とライバル、チャフラスカに笑顔で拍手を送った。

個人総合の後の種目別において、ラチニナは跳馬2位、段違い平行棒3位、平均台3位と金メダルを逃したが、最後の徒手では貫禄を見せ見事優勝、この種目の三連覇を果たした。

66年の世界選手権後に引退し、ソ連のナシヨナ



ラチニナの徒手の妙技
（「64東京オリンピック」1964年）



著者プロフィール

鳥越一朗 (とりごえ・いちろう)

作家。京都府京都市生まれ。
京都府立嵯峨野高等学校を経て京都大学農学部卒業。
主に京都や歴史を題材にした小説、エッセイ、紀行などを手掛ける。
「おもしろ文明開化百一話～教科書に載っていない明治風俗逸話集～」、「天下取りに絡んだ戦国の女～政略結婚クロニクル～」、「恋する幸村～真田信繁（幸村）と彼をめぐる女たち～」、「杉家の女たち～吉田松陰の母と3人の妹～」、「ハンサムウーマン新島八重と明治の京都」、「電車告知人～明治の京都を駆け抜けた少年たち～」、「京都大正ロマン館」、「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」、「平安京のメリークリスマス」など著書多数。

1964 東京オリンピックを盛り上げた 101 人 ～今蘇る、夢にあふれた世紀の祭典とあの時代～

定価	カバーに表示してあります
発行日	2019年1月1日
著者	鳥越一朗
デザイン	岩崎宏
編集・制作補助	ユニプラン編集部 鈴木正貴 橋本豪
発行人	橋本良郎
発行所	株式会社ユニプラン 〒601-8213 京都府京都市南区久世中久世町1丁目76 TEL075-934-0003 FAX075-934-9990
振替口座	01030-3-23387
印刷所	株式会社谷印刷所
ISBN	978-4-89704-472-9 C0021

あとがきに代えて

この本で取り上げた人物のうち、選手を含めてすでに半分以上の人が鬼籍に入っており、今更ながらに月日の流れを感じざるを得ない。アベバやヘイズのように40代、50代で早々と世を去った人もいれば、坂井義則、山中毅などのように、2020年の東京オリンピック開催が決定したあと、二度目のオリンピックを楽しむにしながら、それを待たずに亡くなった人もいる。中には、オリンピックでメダルを取ったがために、死期を早めたように思える人もいるが、そうした生きざまも含めて、彼らは同じ時代を生きた者たちに、何かしら影響を与え続けて来たのである。

間もなく、東京に再びやって来るオリンピック。待ち受ける子供たちの心に、それはどのような形で刻印されるのだろうか。私にはもはや想像するのも難しいが、前回の私がそうであったように、彼らが大人になった時、自らの人生とともに、懐かしく嘯みしめることができるようなものであってほしい。

本書執筆に当たり、大学陸上部の同輩であった三好稔彦氏には、当時の多くのマニアックな競技情報を提供いただいた。また、在仏経験のある従兄の小野修一氏には、フランス語の資料の翻訳でお世話になった。お二人には、紙面を借りて厚く御礼申し上げる。

平成30年師走 京都の自宅にて 鳥越一朗